

## 觀測に従事せんごする同好

### 者の爲めに

(器械は人間がこれを使用するものなる事)

#### 星見小路廬

——この拙文を諏訪なる太陽觀測者三澤勝齋君に呈上し併せて世の同好者の觀測趣味の爲めに捧ぐ——

主客轉倒の謬想は屢々人間の生活にある。同様にこの誤謬は更に屢々末流の科學者の腦裡に喰ひ入る。物理學的認識が哲學者の所謂、何か先驗的思考範疇までも言ふ様なものと感覺的智覺とに其の基礎を置くにすれば、この二つの正確度に從つて物理學的認識の確實性を増す。今其第一の先驗的云々は認識論の範圍に屢するが故に今この問題には觸れない事として第二の感覺的要素に就て、私の思い就いた感想を述べて見やうと思ふ。五官の鈍感な人間は一般に自然科學の研究には其資格に乏しい。然しこの事は先づ別問題として、科學的研究者は敏感な測定を更に敏感にする爲めに色々な測定器械を發明工夫する事に依つて、武装せざる人間の感覺を補ふ。

見よ、醫學者の眼は顯微鏡によつて、天文學者の眼は望遠鏡によつて武装せられ即ち前者はマクロスコピツシユの(肉眼的)世界よりミクロスコピツシユの(顯微鏡的)世界に突入し、後

者は地上的領域より大宇宙的領域に進撃する。かくして物質界の研究は精密なる器械の助けによつて驚ろくべき進歩をなした而して、測定器械が自然研究に必須の要素である事には異論は無い。だが、この點に末流科學者の主客轉倒の謬想も生れたのである。考ふらく、精密なる器械あらざれば科學の研究は不可能なり。蓋し至愚の言と言ふべきである。何となれば彼等は器械が人間の使用するものなる事を全く忘却してゐる。

一國の宰相將帥にして『我等が君主、明君ならざるが故に國家社會の隆盛は不可能な事だ』と考ふるならば彼等は名宰相勇將と言ふ事は出来まい。宰相將帥の明智よく暗愚の王も又名主たらしめるものである。否全く立場を轉換して君主たる人間は宰相將帥の器械を良く指導すべきであらう。

私は今次に一つの挿話を茲に引用しやう。勿論この事柄は歴史的に事實ではあるが、その音樂家が果してアレキサンダー、プーシューであつたか否かは判らぬ。私は唯アレキサンダー、プーシューがこの挿話にふさわしいからその人だとしておく。

嘗てアレキサンダー、プーシューが亞米利加に遊んだ時に北米器械文化の中心たる紐育——私は是非それを紐育であらせた——の街頭に、麗々しい幾多のピラがはり出された。

曰く、『アレキサンダー、ブーシユー三百萬弗のヴァイオリンを奏す云々某月某日』

幾萬の群旨は劇場に押し寄せたを考へよ。而も彼等は各々思へらく、三百萬弗のヴァイオリンは如何に靈妙な旋律を出すであらうか』と。私は此事をくまなく書くまい。事實それは人の未だ聞いた事のない様な神妙な旋律であつた。この絶妙なシンフォニヤによつて幾人かの人々は事實發狂したと言ふ説すらある。而して人々は口々に三百萬弗を眩やき、精巧なる樂器を禮拜した。然し、演奏が終つた時、樂聖アレキサンダーが舞臺の端近くに立つて黄金に憧るゝ群旨を一瞥した次の瞬間に彼が手にせる三百萬弗のヴァイオリンを取り上げるや見事眞二つに破碎した時に、人々は如何に驚ろいた事か。それは最後の審判のラツバの様な恐怖をすらもち來したに違ひない。そして又幾人かの人々は爲めに發狂したと言はれてゐる。事實アレキサンダー、ブーシユーは彼の三百萬弗のヴァイオリンを破碎したのであつた。

彼は動搖して色を失へる群旨を制して言つた。

「諸君、私は三百萬弗のヴァイオリンを奏する事を諸君に約束しました。然し私はそれを違約した事を決してごめては下さるな。實際、私はこのヴァイオリンを昨夜三弗三十五仙で場末の樂器店で買つたのであります。私はたゞ諸君に美

妙なる藝術は決して樂器の如何に依るものでないと言ふ事を告知せしに過ぎないのです」。

自然科學に於てもそうである。チヒヨウ、ブラーへの觀測は單に望遠鏡もない、アストロ、ラーベの改良したものでやつたにすぎないが、それは現代の觀測にコムバラブルな實驗誤差を以て其の結果を出してゐる。

著しい話は外にもある。英國のキャベンデッシュの時代までは未だガルバノメーターの發明はなかつた。然し彼がきめた諸物質の電氣抵抗の順序は現代の順序と一ヶ所も狂つてゐない。而も彼が彼の身體を電流計として使用した事は神聖なる滑稽である。故に天才マックスウエルは彼の著書に曰く。

Cavendish himself is his own galvanometer.

(完)

人は常に何物かを禮拜し、常に何か有限のものの中に表現された絶對者を見るものである。

トマス・カーライル

もろくの星は創造者の坳<sup>あ</sup>坳<sup>ぼ</sup>である。

サー・デービッド・ジル